

ハジマリの前で...



それは「落ちる」といった感覚の方が合っているかもしれない。

真っ暗な闇の中を何かに向かってまっすぐ落ちていく感覚だった。

やがてその先に「点の灯り」のようなものを感じる。

そしてそれにどんとどんと引きつけられていく……

光が見える。



周囲が闇から「瞬にして眩い光に包まれ、吸い込まれていく感じも消えていた。

少しずつ目が慣れてくると目の前に誰かが居るのに気づいた。

それは懐かしい顔だ。

若くして先立って逝った故郷の友人だった。

「やあ、ひさしぶり…」

あの頃とちつとも変わらない笑顔で話しかけてきた。



「ここは？…俺は死んだのかな？」困惑している私に

「そうや…何や、まだ生きたいんか？」

彼はあの頃のままに「こやかにそう言った。

「…いや、やり残したことはいっぱいあるが…」

「そうか、ほな行こか…」そう言っ歩き始めた。

さつきまでの闇はどこに行っただろう？

周囲を見渡しても眩い光だけで風景といったものが分からない。

でもしっかりと地面を歩いている感覚はある。

歩きながら友人は尋ねた。

「で、どうやった？」

「どう…っつて？」

「オマエの人生や。楽しかったか？」

「やっぱり死んだのか？…もう戻れないのかな？」

「なんや？戻りたいんか？」

「嫁さんの稼ぎだけで残りの住宅ローン払っていけないし、子供もまだ

これから父親が必要な時期になるっていうのに…あ、それはお前も同じだったな？」

「せやな、ウチは男の子二人やったしな…」

でもな、これもシナリオやったんやで…そろそろ何か思い出してけーへんか？」

「シナリオ？何の？？」

「人生のシナリオや。まだ思い出されへんか…？」

「思い出すつて…何を？そもそも誰がそんなシナリオを書いた？神様か？」

「何ゆーてんねん…オマエ自身やろ？」

「何を言ってるんだ？俺がいつそんな…」

「オマエが…今のオマエとして生まれる前のハナシや。」

私の目をじつと見つめながら確かめるようにそう言った。

そんな覚えもなく、彼が言っているのか理解できなかった。

が、次の瞬間あるシーンが甦ってきた。

顔や姿ははつきり思い出せないが数人の天使のような子供たちが戯れている。

他愛もないやり取りの中で楽しそうに語られていた。

「次こそは平和な世界に生まれない。」

皆に賞賛されるような成功者になつてみたい。

でも素朴な幸せにも憧れるし、家庭も築いてみたい。

ささやかな幸せを感じながら静かな暮らしを送りたい。」

そんなことを誰かと無邪気に話していた。



「あれは…俺だったのか？」

「そうや、ようやく思い出したか？」友人は笑顔でそう答えた。

いつの間にか周囲には風景と呼べる景色に変わっていた。

背丈ほどもあるう三面のススキの中の砂利道をゆつくり歩いていた。

遠くには傾いた陽に照らされた山並みとオレンジ色に輝く雲が見える。夕方なのか？

「ここがあの子なのか？」周囲を見渡しながら友人に尋ねた。

「いや…これはオマエん中の風景や。オマエの原風景って云った方が分かりやすいやろな。」

「俺の原風景…こんなに寂しい風景なのか？」

そう言いながらも凛として張り詰めた…澄んだ空気が心地いい。

どこからか少し金木犀のような香りもする。

「オマエはどうか人を寄せ付けへん雰囲気があったしな…」

「この世界はオマエが話しやすいよーできとる。」

「…そうか？皆、こういつた自分の原風景を観ることができるのかな？」

「いや、そう思ってる者だけや。」

死んでもまたすぐ繰り返すだけと思つたモンはそのまますぐに生まれ変わるし、

死んだら無になると思つたモンにはお望み通り

無になつて自分の意識すら判らんよーになる。」

「全ては本人の望むまま…つてことか？」

「まあ、そうや…。」

吐く息はわずかに白いのだが、不思議と寒くはない。

気がつくとい人ともあの頃の姿になつていた。

「俺ん中ではオマエは高校ん時のままやで。」

「俺もだよ。」

お互いに何だか照れ臭くなつて笑つた。

姿が高校生に戻つたせいか、あの頃の話が続いた。

好きだった女の子のこと、憧れていたクルマやバイクのこと、



クラブ活動やツーリングなど思い出は尽きなかった。

卒業してからはお互い別々の道に進んだが年に数回はバイクで走りに行く仲だった。

所帯を持つてからも子育てに追われるまでは家族で遊びに行っていた。

ふと気がつくと話の内容に伴ってお互いの姿が変わっていた。

三十歳を過ぎて私は単身上京し、

彼を含めて郷里の友人とは年賀状ぐらいのやり取りになっていた。

「お前が亡くなった時、葬儀に参列できなくてゴメンな…」

「そんなん気にすなや。俺もオマエの葬儀には出られへんからな。」

相変わらず機転の利いた返しだと思った。

「これから…どうすれば？」

「ん？どうしたいんや？」とぼけるような仕草で答える友人。

「別になーんもせえへんでええやん…」

「罪を告白するとか…？」

「オマエがしたければそうすればええ。」



でもそれは絶対せならんことやないし、そもそもやらんとあかん事なんてないで…。」

私は困惑し、そのまま黙って歩いた。

「なあ、観いーや！」友人が真上を見上げて言った。

見上げると空が幾重にも重ねて塗られたように輝いていた。

太陽と反対側は澄んだ青色、そこから陽に近づくにつれて

薄紫、オレンジ、朱色と装いを変えている。

「オマエも昔から夕陽好きやったモンなあ…。」

「ああ、綺麗な夕焼けだな…。これでよかつたんだろうか？」

「まあ、オマエがそう思うんやったら…。それがあるがままやったんやろな。」

「あるがままか…。全てはそうだったんだよな？」夕焼けを眺めながら私は呟いた。

「せやろ？」そう答える友人。

「俺が嫁さんと一人の息子を残して先立つたんも、オマエが

嫁さんと子供を残してしもたんも…嫁さんや子供たち自身が

各々そういったシナリオを描いて生まれ、人生を歩み、選択したからなんやで。」

「ホントにそうなのか？だとしても…納得できないんだ。他に選択肢はなかったのか？」

「あつたやろ？現にオマエは幾度となく選択を変え、

当初のシナリオより十年以上もその時期を遅らせてきたんやで。

それで元々描いていたシナリオとは別の結末を選択したんや。」

「…何か、今になって勿体ないことしたな…って思うんだ。」

「皆そうや。だから次こそは…！と後悔せーへんようよ！つくシナリオを練るんや。」

「何の後悔もなく、意のままに人生を送ることができる…そんなことができる者もいるか？」

「誰でも本人が望むような結果になるように」

インスピレーションは絶えず与えられてんやけどな…皆、聴く耳持たんのや。」

「誰にでも？そうなのか？」

「ああ、そうや。ひとつひとつの選択にもな。

でも直ぐに結果に結びつくものばかりやないで…

大きく大きく巡つてな、最高の歓びを味わえるように仕組んでくれとるのにな。」

「最高の歓び…」

「でもなー、いつもしよーもない価値判断が働いて

思いつた結果とは違うようになってたやろ？」

「…そうだな。」

「俺もこうしてここに来てからやつとそのことが分かってな…勿体ないハナシや。」

笑いながら遠くを見つめて彼はそう言った。

「皆そうなのか？病気や不慮の事故で亡くなった者も？」

「先天的に障害を抱えて生まれてきた者も…？それに犯罪者は？」

「何も覚えてへん当人にとっては信じがたい事やろうけどな…例外なんてあらへん。」

私の目を見て強調するようにそう言った。

「皆、各々が経験したいと思つた環境と姿を自分で選んで生まれて来とる。」

それをこれから如何に変えていくか？つてシナリオを描いてな…」

「何の弊害もなく自由な環境で生まれて来れた者ならともかく、

犯罪を犯さざる負えない環境やら虐待する親や障害を持って生まれる事を選んだなんて

…何の罰ゲームだよ？」

「罰なんてあらへん。」

弊害のハードルを高く設定すればするほどそれを克服した時の欲びつて大きいやろ？

皆、そうやってどんどんハードルを高くしていくんや。」

「何の為に？」

「それが楽しいことやつて本能的に知つとるからや。」

「それが犯罪であつてもか？」

「犯罪を犯す大概のモンには罪の意識なんてあらへん。」

他人から指摘されて初めて意識するモンやろ？」

「誰にもバレず、指摘されなかつたら？」

「ええ事とは思えんでも罪とは思わんやろな。」

ただ、その事について本人は何をやったかは分かつとるやろ？」

僅かにでも疑念があつたら、それは生涯消えんやろな。」

「その程度で済むなんて…腹立たしくならないか？」

「そーゆーにはちゃんとした立場つてゆーのが用意されとつてな。」

その時の対応でまた次の立場が選択されるんや。

その積み重ねがそいつの人格となり自らの人生を左右してくちゅーワケやな。」

「因果応報って事か？」

「まあ、そうゆー言い方もあるわな。

意識しながらする行動も、意識せんとやつとることもみんなそいつの選択や。

ひとつの選択が行われると次の出来事が用意される。

本人にとってエエことも…あんまり有り難くないこともな。

その対応の仕方でそいつの人生が過ごし易くなるか、生き地獄になるか

自ら選択しとるんや。」

「生き地獄か…じゃー、仮に『これがお前の描いたシナリオだ！』と言って

お前を含めて嫁さんや子供たちを殺しに来ようとする奴が現れたらどうする？

受け入れるか？」

「アホか…！俺に返り討ちにされんのがおんどれのシナリオじゃー！って

ゆーてポッコポコにして殺してやるがな。場合によってはそいつの家族も含めてな。」

「犯罪を犯す者も自身のシナリオでは欲びを体现する為じゃないのか？」

「そうや。でも」

「そんなえげつない事、周りのモンが黙つとらせんし、そのまま受け入れるワケないやないか。」

「ありのままを受け入れるのが運命じゃないのか？」

「そんなモン、誰が決めた？」

「それが運命やと思てそのまま受け入れたかったら」

「黙つて殺されたらええ、でも気に入らんかったらその場で選択し直せばええやろ？」

「何度でも…」

「そうだよな。」

山陰に隠れてしまつたと思つていた夕陽が雲の切れ目から覗き、辺りを照らした。

瞬にしてススキ野は黄金色に輝いた。

綿毛のようなモノがフワフワと浮かんで風に流されている。

「キレイやな」この光景に私より友人の方が楽しんでいるようだ。



「何で…人つてスグに自分を追い込もうとするんだろうな？」

何でもそこそこ楽しむ程度に止めておけば…周りが見えなくなることもないだろうに。」

「…何のハナシや？オマエの事か？」

「俺だけじゃなくてさ、周りにいた奴ら皆そんな連中ばかりでな…。」

「似たようなヤツは集まってくるからな…。」

どこかにソコソコじゃー、ツマらんつて気持ちがあるからやろな。

さつきもゆーた通り、弊害のハードルを高く設定すればするほど…。」

「それを克服した時の歓びが大きいって事だろ？」

でも周りが見えなくなつて他人を巻き込んだり、迷惑かけたり…傷つけたり、

そうしなきゃ克服した歓びは得られないのか？生きていけないのか？」

「俺らが別々の姿と環境を選んで生まれくる意味をよー考えてみ？」

様々な環境の中で、そこに暮らす人々の中で、互いに持ちつ持たれつで生きとる事を。

傷つけ合うたり、助け合ったり、迷惑かけたり、思いやつたり、そして愛し合うたり…

そうやって人は人との絆を深め、他人を知り、己を知るやろ？」

人と関わる事で初めて人は人生の意味を知ることができるんや。」

「独りじゃダメなのか？」

「あかんことはないけどな…それが本人の選んだ意志やつたらやろけど…。」

「けど一人で生きとつても独りよがりになりがちで欲びも少ないやろな。」

「生涯独身を貫いて人類愛を唱った偉人もいるぞ。」

「結婚と信頼できるモンがおるつて事とは別やろ？」

「そーゆーことやのーて面倒みならんモンや話し相手がおることが、

相手の事を考え、自分の事を考えるきつかけになるつちゆーこちや。」

「誰もがそれに気づいて人生や世のあるべき姿みたいなのを

「ちやーんと考えればいいんだろーけどな…。」

「別にあるべき姿みたいなモンはないで。」

「あるのは各々が体験しようとする事柄が巧く複雑に絡み合うた世界や。」

「それが潮の満ち引きように生きるにはキツイ時もあるれば生き易い時もあるつて事やな。」

「それでもこっちにきて初めて分かったんやけどな、生きとるウチはみーんな過激や。」



自ら寿命を縮めるよーな真似せんでも…

辛かったら選択を変えりやーええだけの事やのにな。」

「それが俺がさつき言つてた『自分を追い込もうとする』ってことだよ。」

「ああ、せやつたな。生きてるウチはなかなかそれが分からんモンやて…」

「分かつてしまったら…人生が面白くなるからか？」

「そんなこともないんやけどな。」

闇雲に不安を抱いてただ我武者羅に生きていくのと

世の理(ことわり)を理解して生きていくんとではどっちが生き易いか分かるやろ？」

「世の理か…分かつていれば随分楽に生きれたろうな。」

「楽(ラク)やのーて楽(タノ)しくな…」

夕焼けはまだ続いていた。

ゆつくり流れる雲以外はさつきからこの風景は変わっていない。

目の前で鷺のような大きな鳥が草むらから飛び立ち驚いた。

「あービックリした！これも俺の原風景の一部なのか？」

「せやな、時おり刺激的なことも織り交せてな…相変わらず笑いながら友人が答えた。

「刺激のか…うちに来る前の世界は混乱して残酷な事件が頻発していた。

あそこまでやらないと各々がシナリオを体现できないものなのか？」

「それもそんなことないんやけどな…選択やな。本人も然り、周りも然りや。

でもな、ハタから観て救いようのない事故や事件、それを起こしてしもたモンも

巻き込まれた者も各々の描いていたシナリオだったことだけは確かやけど、

それだけやない他の目的もある。」

「他の目的？どんな？」

「世の中を変化させていく影響力や。

幼い子供の痛ましい虐待や死も、残忍な犯罪もそれに自殺も

それを知る人々の心に刻み込まれるやろ？」

「まあ、また他の事件が起これば忘れてしまうだろうけどな…。」

「当事者や少なくともその関係者には忘れられん出来事になるやろ？」

そして二度と同じような事が起こらんようにと対策を考えたり

場合によっては習慣や法も変えようとする大きな変化に繋がる。」

「デモとか：革命ってことか？」

「呼び方はいろいろあるやろけど、世の中を動かす大きな流れのチカラや。

その変化に導く為その時代にそういったシナリオを描いたモンが集まったと考えてええ。」

「各々の似た体現をしようとするシナリオを描いた者は集まるのか？」

「そうや。バラバラで動いとしても時代はなーんも変わらんやろ？」

似たようなシナリオを描いた者は自然に集まって変化をもたらすんや。

地域も社会も国もそして時代も、地球もそれを取り巻く銀河も宇宙も…

自然に静寂と躍動を繰り返し、絶えず変化し続けとる。

俺らがこの前おつたあの惑星のあの時期を選んだんも然りつてことやな。」

「…選べるんだっけ？」

「せやがな。オマエも俺もあの時期を選んだんやで？」

次はどんな星の世界のどんな時代がええ？」

話しが大きくなり過ぎ、もう少し頭の中を整理したくてまた黙って歩いた。

「自分から思い出す前に…ちよつと話し過ぎたかいな？」

笑いながら少し心配そうに言った。

「いや…ああ、少し混乱している。まだ思い出せない事の方が多いのかな？」

「その口調からすると…そうみたいやな。宜しい、何でも先生に訊きなさい！」

彼が少し戯けて言った。

「そう言われてもなあ…」

そう言われても普段から気にかけていたことなんて…特にない。

「心に引っ掛かっている事をいつこずつ解いてつたらええんや。」

穏やかな口調で彼はそう言った。

「つーきーのーかあーげえーもゆるーさざあーなーみいー♪」

浮かんだフレーズを不意に私が口ずさんだ。

キョトンした眼差しで友人が観ている。

「ちーよーのこおらいーくにをーにとむーらいー♪」

彼も歌い始めた。

何の歌だったのか？思い出せない…が自然と口から出てくる。

「よーこれ、覚えとったな…」

「これ…何の歌だっけ？」

「これは俺とオマエが前々世で「緒だった時に歌った歌や。」

「前世だけでなくその前も…？」

「ああ、緒やったよ。前と同じあの国で…その時は姉妹やったけどな…」

話がますますややこしくなりそうなのでそれ以上は訊かなかった。

「あ…」気になっていたことがひとつ思い出せたので尋ねてみる。

「何故、人は一人の能力が高くても組織のように集団になると

同意ばかり求めて決断力に欠けるようになってしまうんだろう？」

それを聞いた彼の顔が驚きから笑いに変わった。

「オマエが訊きたいことって集団心理学なんか？」目に涙を潤ませながら笑っている。

「今はそれぐらいしか思いつかなくてな…」失礼なヤツだと思った。

「まあええか、同意…つまり他人との共感…人の求める本能のひとつやろ？」

各々個別の肉体を持ったあつちの世界では他人との共感を得ることで

信頼が生まれ、社会的な安心が得られるってワケやな。

人が群れを成す基本的な本能の部や。」

「同意を求めるだけでの組織では単なる烏合の衆と何ら変わらんだろ？」

俺が訊きたいのは組織化した途端に何故、個人がスポイルされてしまつて

各々の能力をフルに引き出せる組織作りができないか？ってことだよ。」

「できとる例もあつたで。」

ひとりひとりの信頼関係が必要不可欠やから…まあ確かに僅かやけどな。

それに組織に属することで、「もう全て自分でやらんでもええ」といった

考えが出てくることも確かやしな。」

「単に本能に基づく共感力や他人に対する依存度の問題とも思えないけどな…。」

「そうやな…よっぽど信頼関係の強い組織の長やないと人数が増えれば増える程、

側近以外のモンを個別に見ようとはせんと単なるアタマ数でしか見へんようになるな…」

「俺が居た頃も世界中のあらゆる所で大きな組織が有効な手段を打てぬままに

どんどん機能不全に陥っていった。」

「これは人どう接するか？集団の中でどうふるまうて、どう生きていかなあかんのか？

人の価値観の問題でもあり、基本的な信条の問題やな。」

「基本的な信条？」

「そうやな、他からどうこう言われようが変わらん価値の基準や。」

「変えられないのかな？」

「本人がそう望まん限りな…」彼は天を仰ぎながら言った。

空は幾分装いを変えていた。

夕焼けと云うより日没前と云った色だ。

「オマエがあつちの世界に居た頃まで人類はそれまでの価値の基準まで

変えようとはせへんかったやろ？」

「ああ、でも何故なんだ？」

「変える必要がなかったからやろな。」

それを体現する人生を送ろうとしていた者も集まらなくなったしな。

せやけど、それまで自分たちが信じ、築き上げてきたあらゆるものが機能不全になり、

そのまま生きていくにはさすがに見直さざる負えなくなった。

そんな、人々は指導者を待ったんや。自分たちを導いてくれる英雄を…。」

「英雄？そんなモン現れなかったぞ。俺の居た頃には…。」

「そうやな、もうちよつと後やったモンな。」

「現れたのか？」

「いや、オマエが思つとるよーな劇的なヒーローは現れへんかった。

そうこうしているうちに状況はますます悪化してな、経済破綻、治安悪化、

無政府状態、紛争、飢饉、世界の半数以上を失つて…人々はようやく気づいたんや。



「自分らが本気で変えようとせーへんかったら、なんも変われへん」事をな…。

そしてようやく、本気で世の中を変えようとする人々が

あらゆるところから沸き上がってきたんや。

オマエももう少し別の選択をしとったらその「人」になつてたのにな…。

「そうだったのか？」

「せやけど、その選択せーへんかったやろ？」

「…そうだな。」

「非凡な成功を望んで生まれてきたのに…最後は平凡な幸せを望んだ。」

「そうだったのか…」

「でも、それでよかつたんやろ？」

「…今となつてはよく分からんけどな。まあ、よかつたんだらうな。」

そう答えると友人はあの頃の人懐っこい笑顔で微笑んでいた。

「他に訊きたい事は？」

「今は思い当たらないなあ…」

「ほな行こか？」落ちていたススキの穂を振り回しながら彼はそう言った。

「どこへ？」まだ状況がよく飲み込めていない私は訊ねた。

「ずーっと前からオマエが望んどった処や。」

そう言うと周囲の風景と共に消えていった。

また真っ白な空間に取り残された。

遠近感がよく掴めない。広いのか狭いのかさえよくわからない。

発した声も反響せずに周囲に吸い込まれていく感じがする。

また人影らしきものが見えたと思ったら誰かが現れた。今度は見覚えのない人だ。

「やあ、少しは慣れてきたか？」おもむろにそう訊ねてきた。

「あなたは？」

「私はこの案内役さ。さあ、行こうか。」

「行くつてどなんつ。」

「皆のせいだよ。」

そう言った瞬間、辺りの風景が変わった。

鮮やかな彩りの…差し詰めテーマパークと云った感じの場所になった。

あちこちに沢山の花が咲き、人々が各々楽しそうにくつろいでいる。

どこからかさつき歌も聞こえる。

「ここは？」

「ここにいるのは皆、アナタだ。姿はバラバラだが同じ魂の仲間と言っていい。」

水辺にいる数人の子供たちがこちらに気づいた。

嬉しそうにはしゃぎながら手を振っている。私も応えて手を振った。

皆、どこか見覚えのある顔だ。

「ここで何をすれば…？」彼に尋ねた。

「何も…彼は軽く肩をすぼめて答えた。

「好きに過ごせばいいんだよ。」

「遊ばーよ。」さつき手を振っていた子供たちが駆け寄ってきた。

私の手を取るとそのまま飛び上がった。

「つをー?!」思わず声が出た。

水面に写っている姿は皆子供だった。私も子供に変わっていた。

今までの身体の重さを感じさせない。

「ほら、こうやって飛ぶんだよ。やってらん!」

支えていた私の手を離してこう言った。

誰にも掴まっていないのに皆と同じ高度を保っている。落ちてはいなかった。

「んふつ!」上を向いて気張るとどんどん高く飛べることも分かった。

下を見ると人がごま粒ほどの大きさに見えた。

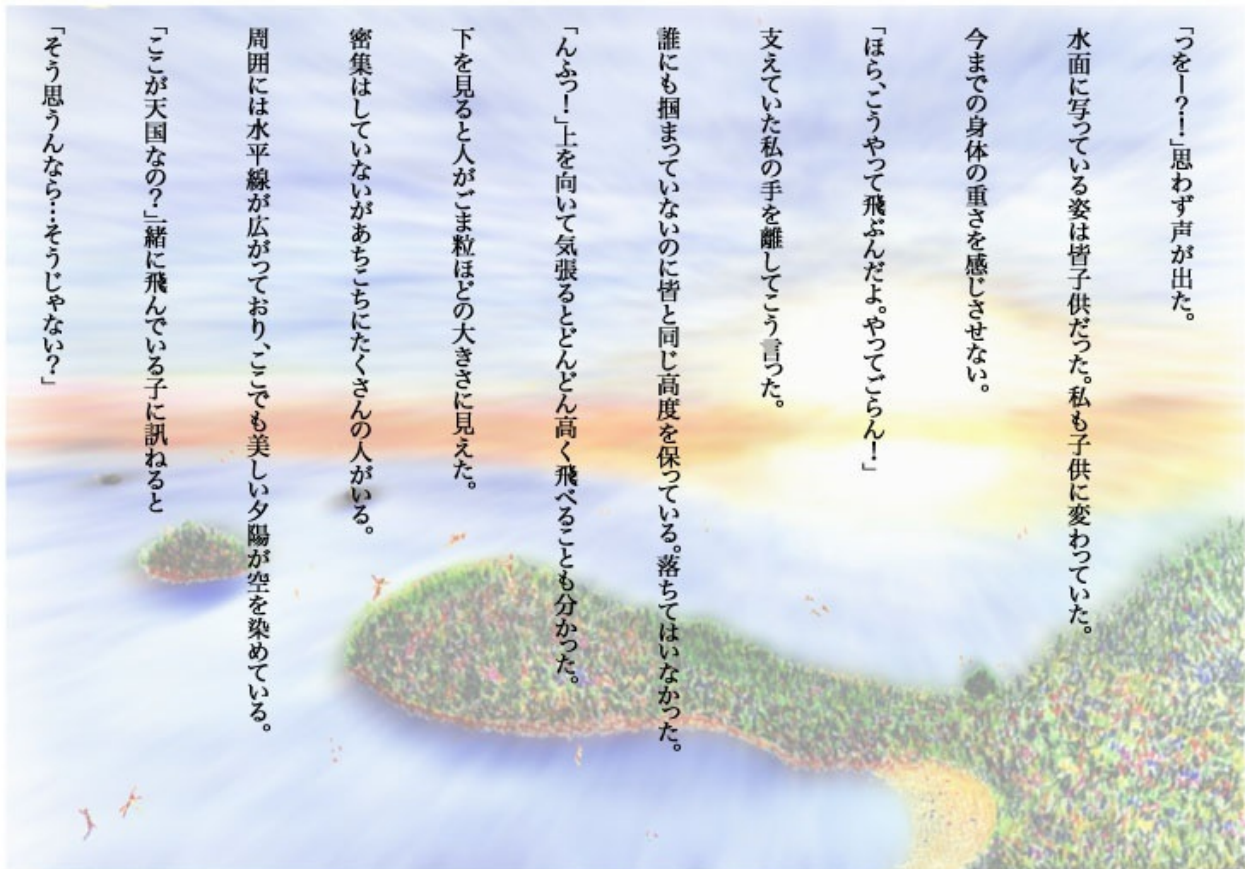
密集はしていないがあちこちにたくさんの人がある。

周囲には水平線が広がっており、ここでも美しい夕陽が空を染めている。

「ここが天国なの?」一緒に飛んでいる子に訊ねると

「そう思うんなら、そうじゃない?」

どこかで観た光景だと思った。デジャヴか?



ああ…そうだ！私がそう答えたんだ。

「キミがそう思うなら…そうじゃない？」

新しくやつて来た子と一緒に空を飛んだ。

その子はおつかなビックリしながら訊ねた。

「ここが天国なの？」

改めてその子を見ると笑ってこう言った。

「おかえり、私。」

数人の子たちが両手いっぱいの花びらを頭上に舞い上げた。

微笑みながら手を繋ぎ、私の周りを回っている。

「おかえり〜」「おかえり〜！」「口々にそう言いながら…」

私を取り囲んで踊っている子が、姿は変わっているがかつての誰だったのかが分かった。

「気がついたみたいだね。」

「嫌な思いもしたね。でもみんな、きみの人生の一部だったんだよ。」



そう聞いてやっと落ち着いた気がした。

「…ただいま、私。」

そう云うと、涙が溢れてきた。

また、始まりの前に…戻って来れたのだ。